

MABOROSHI MEMORY /

ショート×3

ils2

MABOROSHI MEMORY

『書き込み欄が少ないのが渋滞長、書き込み欄が多いのが交通量。』

紙が3、4枚挟まれたバインダーを手渡されて言われた言葉。

一枚目の紙には四角い枠の欄がピッシリと書き込まれ、

枠の左側には段落毎に数字が記載されている。

『君は交通量だね。この器械を持ってね。』

指でボタンを押すと、数字カウンタが一つ回る仕組みの計数器。

『ボタンを押すと数字が一つ増えるから、信号機が赤になるまでそれで数えてね。

赤になったら、その紙に記入して。器械の右横にあるのを回していけば0になるから。』

摘みを回せば、五つある全てのカウンタが数字を切り替えていく。

『乗用車と大型車を区別して、方向毎に押ししてくれば良いから。

大型車の種類は3枚めの紙に載ってるから各自で見て。』

六通りも有るのに、五つしかないボタン。

不審で思案顔になった私を見咎めたのか、考えを見透かされた。

『足りないのは、頭の中で数えてくれ。』

春の気候を微塵も感じさせない、冷えた空気が吹き通る3月。

普段なら、まだ布団の中でまどろんでいる筈の時間帯の6時20分。

そんな朝方に、シャープペンとバインダーと計数器を持って折り畳み椅子に腰掛けている。

ひんやりとした風が剥き出しの顔を嘗め回し、顔の感覚を麻痺させていく。

手袋を嵌めていても、ほんの少し手がかじかんでしまいペンを取り落としそうになるし、

ブーツだからと見くびって靴下一枚で済ませたら、足の先が痛くなってきた。

風除けが一切ない見晴らしのいい道路で、

寒さで縮こまりながら視線の向こうにある信号機を見つめていた。

腕時計を確認してみても、時間は先ほどと大して変わらない。

測定時間の7時になるまで27分間もこのまま手持ち無沙汰の俣で待たなければならない。

後ろを振り返れば、蛍光色のチョッキを着た渋滞長のバインダーを持った人が突っ立っているだけ。

風も冷たく気温の低い休日に、朝方から散歩をする奇特な人なんか居ない。

皆が家で温んでいる中、一つの交差点を向き合うように8人の交通量調査員が待機していた。

時たま横を通り過ぎる車の音だけが小さく反響しては消えていき、

自分の口から吐き出した息は空気中で白くなって霞みながら、

吐息の音が自分の鼓膜の中だけで響き渡る静かな一時。

何も考えずに、ただ時間の経過を待ち望んでいた。

少しずつ顔を出し始めては、千切れ雲や丸裸の木々、

無機質な電柱や家々の壁を朱色に染め始めた太陽。

柔らかい温もりを感じさせる陽光が体に当たり、冷え切っていた体をほんのり温める。

開始時間は... 10分後。

風の冷たさは一向に衰えないけど、

それを和らげてくれる日の光が在るから辛抱できそうだ。